

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006 年度～2008 年度
 課題番号：18330132
 研究課題名（和文） 介護関係の形成と転機：在宅介護の構造と変動要因に関する縦断研究

研究課題名（英文） Establishment and turning point of care-giving relationship:
 Longitudinal study on structure of home care and its influencing factors

研究代表者 高橋 龍太郎(Takahashi Ryutaro)
 財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所 研究部長
 研究者番号：20150881

研究成果の概要：

要介護高齢者の在宅生活の限界点とその規定要因を明らかにすべく、東京都葛飾区および秋田県大館市の居住者を対象に、平成 15 年度、平成 17 年度に引き続き、1373 組の要介護高齢者と家族主介護者の第 3 波追跡調査を平成 19 年度に行った。平成 20 年度はこの縦断データの解析と、研究者が直接インタビューを実施して得られた質的研究データについて分析を進め、今までに得られた結果をもとに協力者に向けたリーフレットを作成し送付した。また、第 1 波と第 2 波のデータを中心に、11 章からなる研究成果の単行本の発刊を予定している。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	2,800,000	0	2,800,000
2007 年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
2008 年度	2,500,000	750,000	3,250,000
総計	14,400,000	3,480,000	17,880,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：介護保険、社会福祉関係

1. 研究開始当初の背景

平成 12 年に始まった介護保険制度による高齢者介護の新たなシステムは、導入から 5 年を経て再構築されようとしている。この間施設入所偏重を回避・是正しようという試みが実行されているが、施設入所待機者数の増加は抑制されていない現状がある。

我々は、要介護高齢者の在宅生活の限界点とその規定要因を明らかにすべく、科学研究費補助金を得て調査を実施してきた。対象は、東京都葛飾区および秋田県大館市・田代町(平成 17 年 6 月より大館市に合併)に居住する 1373 組の要介護高齢者と家族主介護者で、平成 15 年度に第 1 回目の統計的・質的調査を実施し、平成 17 年度に同じ対象者の第 2

回目追跡調査を実施した。その結果、第 1 回目から第 2 回目の 2 年間に 2 割を超える高齢者が死亡し、長期入院・入所率も約 1 割みられた。さらに、要介護高齢者と介護者の事情の変化から、第 1 回目と同じ状況で介護を継続しているのは半数に過ぎないことが明らかとなった。

そこで今回、第 3 回目の統計的追跡調査を平成 19 年度に予定することになった。対象者の死亡、入所、その他介護事情の変化から、本研究の対象者は第 3 回目の調査をもって集団としてほぼ消滅すると推察され、これによって本調査研究も完了する。

2. 研究の目的

本研究の対象者の最終的な転帰（死亡、入所・入院、在宅生活の継続等）を明らかにするうえで、第3回目の調査は重要な意味を持つ。主な目的として次の諸点があげられる。第一に、高齢者のADLおよびIADLニーズと、そのニーズに対応するためのサービスの利用状況、および家族等のインフォーマルサポートの状況のような在宅要介護高齢者を支える介護体制の多様性が、要介護高齢者の転帰とどのように関連しているのかを検討することである。第二に、介護に関する決り事とどの程度関わっているのか、この意思決定過程への要介護高齢者と家族介護者の参加の程度と、双方の参加についての認識の一致・不一致が、その後の介護サービス利用や入院・入所の決定にどのように影響を与えたかを明らかにすることである。第三に、要介護認定を受けながら介護保険サービスを利用していなかった高齢者とサービスを利用していた要介護高齢者とがその後のサービス利用や要介護高齢者の最終的な転帰においてどのような違いがみられたかについて検討する。第四に、葛飾区で33%、大館市・田代町で20%を占める男性介護者の介護負担感、主観的健康、要介護高齢者との関係性、他の家族・親族との関係、サービス利用の状況等について、続柄および地域別の検討、女性介護者との比較を行い、男性介護者の特性を明らかにする。さらに、本研究で新たに作成した介護充実感尺度を用いて介護体験の構造をめぐる欧米との相違を検討するとともに、それが要介護高齢者との関係や最終的な転帰とどのように関連するかを検討する。

3. 研究の方法

研究の実施に当たっては、連携研究者、海外共同研究者と役割分担を明確化し、有機的な連携を図った。研究代表者の高橋は研究全体の統括、および高齢者・介護者の心身の健康状態と介護負担、サービス利用、低栄養状態の介護サービス利用への影響、死亡・入所との関連、認知機能の変化と介護関係への影響を担当する。連携研究者の須田は、ADLニーズとそのニーズへ対応するサービス利用状況、インフォーマルサポートの状況と相互の関連、主観的介護負担に関わる諸要因の統計的分析を担当する。連携研究者の出雲は、2地域における基本統計の比較、主観的介護負担と介護保険サービスの利用状況、介護保険サービスにおける保健と福祉の連携を担当する。連携研究者の西村は、調査統計データの整理、確認、介護充実感尺度と主観的介護負担感など他の変数との関連の分析を担当する。連携研究者の杉原は、調査票作成、分析の基本計画、死亡・入所など転帰データをもとにしたサービス利用の効果の時系列

分析を担当する。連携研究者の菊地は、ケアマネジャーの認知度変化とそのサービス利用実態への影響を担当する。また、海外研究協力者の担当は以下のとおりである。J.キャンベル：介護保険制度の現状と課題、視察と文献調査による政策的分析。R.キャンベル：主観的介護負担と家族関係、介護体験の肯定的側面。S.ロング：日本における家族関係の変化と社会家族的動因、介護保険サービス利用の意思決定と過去の家族関係。

平成18年度の研究計画：平成17年度の第2回統計調査結果のとりまとめと調査協力者へのフィードバックのためのリーフレット作成、介護保険制度の改正に伴うサービス提供状況の変化の確認、平成19年度の第3回最終統計調査に向けた調査票設計の見直しを行う。

平成19年度の研究計画：第3回最終統計調査の実施と結果のとりまとめを行う。調査は調査会社に委託し、2地域の1373組の要介護高齢者と家族主介護者を追跡する。

平成20年度の研究計画：縦断統計調査データのとりまとめとリーフレット作成・印刷と送付、海外研究協力者との交流・打ち合わせ、最終報告書の作成を行う。

4. 研究成果

(1) 要介護高齢者本人への調査結果

要介護高齢者の世帯類型は、2地域全体で“一人暮らし”34.6%、“夫婦のみ”13.7%、“既婚子同居”15.4%、“未婚子同居”12.9%、“その他”2.5%であった。地域別に見ると、葛飾では“夫婦のみ”が多いのに対して、大館では“既婚子同居”、すなわち、子供夫婦と同居している要介護者が多い。

同居開始時期では、“介護開始以前から同居”が全体の93.8%であった。別居から同居への移行方法についてたずねたところ、葛飾では“呼び寄せた”が50.0%であったのに対して、大館では“自分が転居した”が77.8%と多く、介護者本人が転居する傾向であった。

要介護高齢者の要介護度の分布は、葛飾では軽度者と重度者の両極に分布している一方、大館では要介護1・2の中等度者に多く分布しており、地域的に有意な差がみられた。

日常生活動作（ADL）で介助が必要な動作は、“階段昇降”46.8%、“入浴”40.6%、“歩行”38.7%の順であった。また、“もっと手助けがほしい”動作については、“階段昇降”23.0%、“歩行”21.8%、“トイレ”20.9%、“排便”20.0%、“室内移動”19.7%、“排尿”17.9%、“入浴”14.1%の順となっていた。葛飾で“もっと手助けが必要”という人の比率が高かった。

掃除、洗濯、料理、買い物など手段的日常生活動作（IADL）の手助けをしてくれる人は、“ホームヘルパー”50.8%、“配偶者”30.5%、

“同居の息子”13.7%、“別居の娘”12.7%、“同居の娘”11.4%、“同居の嫁”11.1%、となっている。地域的には、葛飾では IADL の手助けに別居子が参加しているのが特徴であった。

「介護に関わる決め事に、あなたの意向はどのくらい生かされていると思いますか」という質問に対しては、“大いに生かされている”38.4%、“まあ生かされている”42.4%で、地域的には、大館・田代で“大いに生かされている”は53.2%と高い一方、葛飾では29.4%と低かった。

介護費用の負担感について、“多少負担”31.5%、“非常に負担”は17.1%という結果だった。葛飾で“非常に負担”は21.2%に対して、大館は10.1%と低く地域差がみられた。

うつ傾向については、およそ半数近くが日常生活の中で“楽しい”とか“うれしい”といった感情を頻繁に感じないと答え、50%近くが“おっくう”を感じ、“不眠”や“ゆううつ”も40%を超え、“やる気がない”、“さみしい”、“悲しい”という意欲と感情の低下が30%を超え、全体に要介護高齢者のうつ傾向は高い。葛飾は6.90点、大館は5.74点であり、葛飾の要介護者の方がうつ傾向が有意に高くなっており、とりわけ葛飾の“女性”でのうつ傾向が強くみられた。

(2) 介護者への調査結果

主に介護をしている人は、“要介護者の配偶者”が44.2%を占めていた。葛飾では50.0%、大館では37.4%であった。次に高い割合は“要介護者の子ども”で、全体では35.2%、葛飾では40.8%、大館では28.6%であった。“要介護者の子どもの配偶者(婿・嫁)”は、全体で16.8%、葛飾では6.9%、大館では28.6%で地域間の差が大きかった。性別は、“女性”が68.5%、“男性”31.5%で、葛飾では“男性”が39.1%、大館は22.4%と葛飾で男性介護者の割合が高かった。

介護年数の平均は8.0(±5.1)年、葛飾が8.2(±5.3)年、大館が7.7(±5.0)年であった。前回調査から主介護者が“代わった”が6.3%あった。

要介護者との現在の関係について、“うまくいっている”が23.2%、“まあうまくいっている”が51.9%であり、8割強の主介護者は要介護者との関係を「ほぼ良好」と捉えており、地域間の差はなかった。

要介護者の日常生活動作(ADL)に対して現在行なっている介助が十分かどうかをたずねたところ、「歩行」「トイレ使用」「整容」「排尿」「排便」の5項目について大館よりも葛飾で“不十分(もっと手助けが必要)”と回答している割合が高かった。

ホームヘルパーが要介護者の日常生活動作(ADL)を手助けしている割合は、葛飾が

39.9%なのに対して大館では24.3%と低く、地域間で有意な差が認められた。葛飾の場合、配偶者以外では同居の子ども(息子・娘)、別居の娘など実子とホームヘルパーに寄って介護ネットワークが形成されており、大館では子どもや嫁を含む同居家族を中心に介護ネットワークが作られている。

過去1ヶ月間に見られた要介護者の認知症状について多く見られたのは、「自分の年齢がわからない」25.1%、「自分の住んでいる地区がわからない」22.1%、「時々道を間違える」19.0%であった。地域間の比較では、「一日中とりとめのない話をする」「手当たり次第食事をする」「夜起きて騒ぐ」「道を間違える」などで有意な差が認められ、「道を間違える」を除く3項目で葛飾よりも大館で“はい”との回答が多かった。

介護に関する決め事について、誰が決定主体であるか“要介護者本人”“主介護者”を除いた場合、葛飾では、親族よりも医療福祉関係者が多く関わり、その職種も多様であるのに対して、大館では親族の割合が高く、医療福祉関係者の中では“ケアマネジャー”のみ圧倒的に高い割合を示していた。

主介護者の意向がどれだけ生かされているのかについてたずねると、“大いに生かされている”“まあ生かされている”の合計が87.5%を示していた。介護をする上で家族からの協力を得ることが、どの程度難しいと感じるかという問いに対しては、“あまり難しくない”が31.3%で最も多かった。地域間に有意な差は認められなかった。

主介護者に高齢者介護に対する考えをたずねた。「高齢者への経済的支援」では、葛飾・大館ともに“そう思う”割合が8割を超えており、高齢者への経済的支援を当然とする考え方が強かった。「高齢者介護は家族が担わなくてもよい」では、葛飾・大館ともに“そう思う”割合が4割程度、“そう思わない”割合は6割程度であった。

公的サービス利用について、「身内で手が回らない場合に限って公的サービスを利用する」という消極的な傾向が52.1%と高く、「身内でできることであっても公的サービスを積極的に利用する」という積極的な傾向は13.5%にとどまった。大館が葛飾に比べて消極的な傾向が強く有意な差がみられた。

要介護者の施設入所について、“家族や親戚・知人に相談した”は大館が14.3%で葛飾の6.9%よりも高く、“入所可能施設を調べた”では、葛飾が14.9%で大館の8.2%よりも高く、それぞれ有意差がみられた。

担当ケアマネジャーの態度について、すべての項目で肯定的回答の割合が高く、「要介護者や家族の立場で考える」95.1%、「介護について相談に乗ってくれる」95.5%、「的確な判断を下してくれる」93.4%などであっ

た。

「なぜ、その事業者からサービスを受けることにしたか」選定理由をたずねた。最も多かったのは“ケアマネのすすめ”で42.5%を占めていた。葛飾では“ケアマネのすすめ”が48.8%、“近所にあったから”が22.0%であった。大館では、“行政に関する組織だから”が最も多く31.6%、“ケアマネのすすめ”“家族・親戚・知人のすすめ”が同率の28.9%であった。

介護にかかわる費用の出所については、“要介護者の収入から”が88.5%（葛飾87.9%、大館89.1%）であった。“介護者の収入・預貯金から”は19.6%あり、葛飾25.9%、大館12.2%と介護費用を介護者の預貯金から補助している割合は葛飾が高かった。介護費用の負担感については、“あまり負担ではない”が最も多く32.8%であった。

主介護者の健康度は“まあ健康（普通）”との回答が最も多く53.1%であった。主介護者が要介護認定を“受けている”のは6.9%あり、葛飾で8.6%と大館の4.8%に比べて高かった。さらに葛飾では“要介護2”以上の認定を受けながら主介護者として介護に当たっている方が5名いた。大館の要介護認定介護者では、“要支援1”から“要介護1”の軽度に集中していた。

主介護者の蓄積的疲労徴候を測定したところ、地域比較で、男性は有意な差は認められなかったが、女性を比較すると、葛飾の方が大館よりも高く、有意な差が認められた。介護負担感でも、葛飾が大館よりも負担感が高い状態であった。男女別では、大館の男性介護者、葛飾の女性介護者の負担感が高かった。

介護ストレスを解決する方法についてたずねたところ、「周りの人の協力を得ている」「悩みを聞いてもらう」「介護者同士で励ましあう」は回答が少なかった。これらはストレス解消や負担軽減に有効であるといわれている対処方法であるが、あまり活用されていない状況が推察される。主介護者のうつ状態を測定したところ、男女別で、葛飾では女性介護者、大館では男性介護者にうつ傾向が強いことがわかった。

(3)在宅生活が終わった要介護者の入院・入所、死亡などの転帰について調べた。全体では“死亡”が295人、77.8%を占め、葛飾では163人、79.5%、大館では132人、75.9%であった。入院・入所場所を地域別に比較すると、“一般病院”は葛飾で多く、“療養型医療施設”や“特養老人ホーム”は大館で多かった。これらは地域による介護保険施設や老人関連施設の設置状況によると思われる。

入院・入所者の平均入所期間は16.1ヵ月（葛飾：12.4ヵ月、大館：19.9ヵ月）で、

地域的な有意な差がみられた。

死亡者の死亡場所については、全体では“病院”が69.8%を占め、次いで“自宅”が22.4%となっている。“自宅”は葛飾で27.6%と大館の15.9%と比較すると2倍近く高く、“病院”は葛飾で67.5%に対して、大館では72.7%であった。

要介護者が死亡した回答者に対して、「介護した体験をふりかえって、今、どのように感じているか」を尋ね、その自由回答を記載した。全体では289人、98.0%の回答者が回答してくれた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

Yuko Suda. Depressive symptoms and care problems in Japan. Journal of Eastern Asian Association on Cultural Psychiatry. (2009) In press.

Susan O. Long, Chie Nishimura, Ruth Campbell. Does it matter who cares? A comparison of daughters versus daughters-in-law in Japanese elder care. Social Science Japan Journal. (2009) 12: 1-12.

〔学会発表〕(計4件)

Ryutaro Takahashi, Ruth Campbell, Susan Long, Yoshiko Yamada, Hiroko Kodama, Chie Nishimura, Yuko Suda. Long-term care insurance system and factors related to stable care relations in Japanese elders. The 19th World Congress of Gerontology and Geriatrics, 2009/7/5-9, Paris France.

Yuko Suda. Depressive symptoms and care problems in Japan. Eastern Asian Association on Cultural Psychiatry, 2008/12/19-22, Sun-Moon Lake, Taiwan.

Ryutaro Takahashi. Family care and utilization of long-term care insurance services, 第50回老年医学会学術集会日韓合同シンポジウム, 2008/6/19, 千葉.

西村昌記, 高橋龍太郎, 須田木綿子, 出雲祐二, 西田真寿美. 介護を要するひとり暮らし高齢者のサポート・ネットワーク, 第50回日本老年社会学会大会, 2008/6/27-29, 大阪.

〔図書〕(計3件)

Long, Susan Orpett. Someone's Old, Something's New, Someone's Borrowed, Someone's Blue: Tales of Elder Care at the Turn of the 21st Century. In Imagined Families, Lived Families: Culture and Kinship in Contemporary Japan. Akiko Hashimoto and John Traphagan, eds. 2008. Albany: SUNY Press.137-158.
Long, Susan Orpett. Social Change and Caregiving of the Elderly. In The Demographic Challenge: A Handbook about Japan. Florian Coulmas, Harald Conrad, Annette Schad-Seifert, Gabriele Vogt, eds. Leiden: Brill. 2008. 201-216.
高橋龍太郎、須田木綿子(著者代表), 在宅高齢者と家族(全11章). ミネルヴァ書房. 2009.

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 龍太郎 (TAKAHASHI RYUTARO)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究部長
研究者番号: 20150881

(2)連携研究者

杉原 陽子 (SUGIHARA YOUKO)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員
研究者番号: 80311405

菊地 和則 (KIKUCHI KAZUNORI)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員
研究者番号: 00271560

須田 木綿子 (SUDA YUKO)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号: 60339207

出雲 祐二 (IZUMO YUJI)
秋田看護福祉大学・社会福祉学科・教授
研究者番号: 60232419

西村 昌記 (NISHIMURA MASAKI)
東海大学・健康科学部・准教授
研究者番号: 70408037